

# 浦賀文化

令和 2 年 (2020 年) 7 月 1 日

第 62 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 浦賀の造船工業に貢献した渋沢栄一

(一八四〇〜一九三一年) 幕末から昭和の初めにかけて活躍した大実業家。日本の資本主義の礎を築き、五〇〇の会社・六〇〇の公共事業に携わったといわれる。



令和六年(二〇二四年)から発行される新一万円札の肖像になる渋沢栄一は、数多くの企業や金融機関・学校などの設立・運営に携わり、日本における資本主義の父とも呼ばれ、これまで何度もお札の肖像候補に上げられてきました。今回は、この、渋沢栄一が私たちの暮らす浦賀とどのような関係があったのか、見ていきたいと思います。

西浦賀のマリンリゾートに接して、今は使われなくなつたレンガ積み風のドックがあります。ここは、明治時代に、東京に本部を置く石川島造船所により建造されたものです。東京の石川島の地は大型船舶の建造修理に不便なため、取

締役会長を務めていた渋沢の提案により東京湾の入口である西浦賀(川間館浦)に分工場として造船所の建設が計画されました。(以下川間ドック)すでに会社として登記を済ませていた浦賀船渠は、競合することを懸念し、両社の合併を試みました。しかし、調整がつかないまま、浦賀船渠より一年余り早い明治三十一年川間ドックの営業が開始されます。案の定、お互いの受注合戦は収まることなく、経営難に陥ります。再三再四の交渉の末、渋沢による助言と買収資金の調達への助力によって円満な合併が成立し川間ドックは浦賀船渠に譲渡されることとなります。その後も、

明治末期から大正期にかけて浦賀船渠の相談役に就任した渋沢は、浦賀船渠の経営不振を立て直すために東奔西走しました。

住友重機械工業が出版した社史『浦賀・追浜百年の航跡』によると、「かくして当社創業試験時代に当代有数の実業家

である渋沢栄一・浅野総一郎両氏が当社再建のために尽力した事は銘記すべき事である」と述べ、渋沢の功績を称えています。

渋沢栄一は、江戸時代の末期である天保十一年(一八四〇年)に武蔵国血洗島村、現在の埼玉県深谷市で富裕な農家に生まれました。血洗島という恐ろしい地名ですが、いくつかの伝説や言い伝えが残されています。その一つに、赤城山の霊(ムカデ)が日光山の霊(オロチ)と戦場ヶ原で戦い、片腕を取られて、その傷口をこの地で洗ったことからという伝承があります。渋沢は二十四歳で村を出てから他郷で活躍している時に、たびたび地名の由来を尋ねられたそうです。

さて、幼少期から読書や漢籍の手ほどきを受けて育ち、剣術も身に付けるうちに、幕府を倒し天皇中心の国家をつくる思想(尊王攘夷)に目覚めていきました。しかし、近親者からの説得により、一転して一橋家(十五代将軍徳川慶喜)に仕えることとなり、慶応三年(一八六七年)、幕臣としてパリで開催された万国博覧会に派遣されます。この

当時のことについて、渋沢は次のように語っています。  
「余は当時大いに悲観して、二君に仕える意は毛頭ないから、もとの浪人にでもなろうかと思つた時に當つて、民部公子(徳川昭武。徳川慶喜の弟で、当時十四歳)に従つてフランスへ行けという命が降つたのである。全体余は初め攘夷論者であつたけれども、四圍の情勢からいつまでも鎖国主義を取ることの不可能を知り、機会があれば西洋の事情も知りたいと思つていたので、意を決してお受けしたのである」(『論語講義』)

### ★参考資料

- 浦賀・追浜百年の航跡 住友重機械工業株
- 論語講義(渋沢栄一述) 二松学舎大学
- 福沢諭吉全集第十四巻 岩波書店
- 渋沢栄一記念館ホームページ



# 歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その十二

郷土史家 山本 詔一



## ●嘉永元年の浦賀●

弘化三年（一八四六年）のビッドル艦隊の来航を受けて、江戸湾の警備体制は三浦半島に川越藩と彦根藩、房総半島には会津藩と忍藩が警備をする四藩体制に改編された。そのことにより浦賀奉行所は、江戸湾警備よりも「異国船来航時の応接掛」としての役割を果たすようになった。また、備えを更に強固なものとするため、御備船の洋式化すなわち洋式軍艦の導入を進める動きが起り、浦賀の両奉行とも積極的な立場をとっていたが、軍艦の導入は否決されている。しかしその後、浦賀では大筒を備えることのできる和洋折衷のスループ船の建造が許されている。江戸の富谷忠良が記した『浦賀紀行』（『三浦半島見聞記』所収）に、「大ヶ谷町の海岸に船匠あり、橋本金助・中村三右衛門・鴨居勘左衛門という、今造り出せる洋船あり、高さ四〜五丈（十二〜十五メートル）もあらん、その他の大なる推してしるべし」と巨大な船の建造風景を見て驚いている様子が書かれている。この船は、嘉永二年（一八四九年）に完成した和洋折衷の船『蒼隼丸』であったと推測される。

もつとも、船は海に浮かんでいてとあまり大きさを感ぜないが、千石船でも陸にあげるとかなり大きい。ましてや、陸に上がった船などを見慣れない江戸の旅人には小型の蒼隼丸であっても巨大に感じられたのであろう。

『浦賀紀行』の著者・富谷忠良とは、どのような人物であったのであろうか。というのは、ただ浦賀や三浦半島を物見遊山にきただけとは思えない節がある。東浦賀の徳田屋に到着すると直ぐに浦賀奉行所の同心・中田佐太郎の役宅を訪ねて、もてなしを受けている。その後、中田氏の案内で平根山や鶴崎台場を見学している。さらに翌日には、同心・中村此右衛門を訪ねると、もう一泊して欲しいなどと足止めされるほどであった。この中村氏を訪ねる途中で、上記の造船現場を見ている。

浦賀の役人たちと富谷がどのような関係であり、彼がどんな人物であったのか、大変興味深い。今のところは何もわかっていない。どなたかご教示をいただければ幸いです。

嘉永元年（一八四八年）五月には、与力六騎と同心十人が増員され、役宅の完成が間に合わないまま、翌月には浦賀へ赴任されている。

同年六月、奉行・浅野長祚は、オランダ通詞で浦賀詰になつていた堀達之助の任期延長を願い出、さらに十月には、西洋の辞書や地図などの

備え付けを願い出たが、どちらも却下されている。また、副奉行格の支配組頭を置くことも申請したが、これも却下されている。浅野の申し出はなかなか取り入れられなかったが、支配組頭については嘉永三年（一八五〇年）三月ようやく認められて、辻茂右衛門と尾高高蔵の二名が役職に就いている。さらに、幕府も旧式の備えしかない台場を問題とし、山の上で老朽化した平根山台場と海に近すぎて浪をかぶつてしまふ鶴崎台場を閉鎖し、灯明堂の先に千代ヶ崎台場と浦賀湊と船番所を守る亀甲崎台場を船番所に隣接する場所に新設することを決め、どちらも浦賀奉行持ちとした。

平根山台場は江戸湾口が一望できる場所であったので、遠見番所と狼煙（のろし）台が置かれ、非常事態に備える第一線の役目はそのまま継続された。

### （俳句の散步道）

御出座しの狸々坊や夏は来ぬ 大塚遊球子

満天星の一灯提げて暗夜ゆく 嶋口つかさ

## 7月1日(水)より コミセンの利用を再開します

### 『新しい利用様式』

- 発熱、風邪症状のある方の入場禁止
- マスクの着用、手洗いや消毒の徹底
- 定員の半以下（目安）での利用
- 換気の徹底
- 人との接触や近距離での会話、大声での歌唱を避ける

\*新しいルールを守って活動しましょう！\*

この他にも、利用にあたってのお願いがあります。詳しくは、横須賀市HPなどでご確認ください。

### 笑話一題

先日、ラジオを聴いていたら、鳥の鳴き声についての話を耳にしました。ラジオではツバメのさえずりは「ツチクツテ、ムシクツテ、クチシブーイ（土食って、虫食って、口渋い）」と聞こえるというものでした。興味が湧き、ネットで調べてみると、鳥のさえずりを人間の言葉やフレーズに当てはめて覚えやすくした「聞きなし（做し）」といわれるものだとわかりました。

有名なところだと、ウグイスの「ホーホケキョ（法 法華経）」です。その他にも、メジロの「チヨーベイ チューベイ チョーチューベイ（長兵衛 忠兵衛 長忠兵衛）」ホオジロ「イッピツケイジョ ウツカマツリソウロウ（一筆啓上仕り候）」センドアイムシクイ「ショウチュウイッパイグイー（焼酎一杯ぐい）」など、面白いものがたくさんありました。他にもたくさんあるようなので引き続き調べてみたいと思います。

ご近所への散歩の時など、鳥のさえずりに耳を傾けてみてはいかかですか？  
(ふゆてん)

